

# Steinbeck の混乱

—The Moon Is Down 論—

中 地 晃

*The Moon Is Down* (1942) は Steinbeck の第二次大戦への協力から生れた。(1)

Lisca によれば、Steinbeck は先づ親友の Ed Ricketts と共に、大平洋上の日本領の島々に上陸する場合に必要な海の深さとか潮流についての日本の動物学者の論文を集めた。これは軍に採用されなかったが、Steinbeck はさらに敵の経済を混乱させるため、にせ札を投下することを提案した。また空軍基地を写真家 John Swope と共に訪れて宣伝文を書き *Bombs Away* (1942) として出版した。さらに1943年始めには *New York Herald Tribune* の外国通信員として輸送船で Europe へ行き、England の空軍基地や、North Africa や Italy を訪れ、“G. I. Joes” の姿を報道した。これは後に *Once There Was a War* (1959) として出版される。この時期の Steinbeck の作品の大部分は journalistic なものであり、*The Moon Is Down* (1942) も *Bombs Away* の場合と同様に軍の専門家の話を聞くことから始められた。Office of Strategic Services の Willam J. Donovan 大佐とドイツ占領下の国々の抵抗運動について何回か討論した後1941年の夏に書き始め、1942年の3月に出版された。しかしこれは *Bombs Away* とは異なり、Steinbeck の第二の play-novelette と言われ、Steinbeck 自身もこれを *Steinbeck and His Critics* に収められた “My Short Novels” の中で *Of Mice and Men* (1937) 等と同列に扱っている。

(1)

*The Moon Is Down* は侵略軍に占領された北欧の海岸の小さな町の市民の抵抗運動を描いた作品である。Steinbeck は Orden 市長の抵抗と死刑を軸として市民の抵抗運動を描いているので、先づ市長の行動を見よう。市長は第一章で占領軍の Lanser 大佐が石炭の採掘と積み出しの仕事に住民を協力させて欲しいという要請に抵抗し、私は選挙で選ばれた人間だから市民の意志を無視することは出来ないと言う。

市長公舎に司令部を置きたいという要求にも市長は市民は賛成しないと拒否するが、Lanser 大佐はそれを無視して司令部を置く。第三章では市長は Bentick 大尉を殺した Alex Morden に判決を言いわたすように Lanser 大佐に頼まれるが、それを拒否し、あなた方は人間の精神を打ち砕くという不可能なことをしようとしているのだと Lanser 大佐を皮肉る。第

四章で市長は Lanser 大佐, Hunter 少佐, Tonder 中尉, Loft 大尉, Prackle 少尉等の列席する Alex Morden の裁判で, 侵略軍を非難する。

“Alex, these men are invaders. They have taken our country by surprise and treachery and force.”<sup>(2)</sup>

“...Yours was the first clear act. Your private anger was the beginning of a public anger...”<sup>(3)</sup>

“Alex, go knowing that these men will have no rest, no rest at all until they are gone, or dead. You will make the people one...”<sup>(4)</sup>

しかし, Alex Morden が広場で処刑された後, Prackle 中尉が何者かに肩を撃たれたため, 市長は保護監禁される。第六章では監禁されている筈の市長は Dr. Winter とともにひそかに Molly Morden の家へやって来て, 裏切り者の Corell を連れて England へ行こうとしている Will Anders と Tom Anders の兄弟に, 軍事施設の爆撃を頼むように言い, さらにダイナマイトや手榴弾のようなものを落してくれるように頼む。第七章では市長が反抗的な市民の指導者であり, Tonder 中尉が殺された晩にもその現場の家にいたということを Corell が Lanser 大佐に訴えたために市長と Dr. Winter は逮捕され, 第八章では Lanser 大佐から市民が抵抗をやめなければ射殺すると言われても, 恐れることなく民主主義の終局的勝利を予言する。

“...Free men cannot start a war, but once it is started, they can fight on in defeat. Herd men, followers of a leader, cannot do that, and so it is always the herd men who win battles and the free men who win wars. You will find that is so, sir.”<sup>(5)</sup>

そして処刑されるべくドアの方へ歩いていく。

## (2)

一方, 市民の抵抗運動も市長の抵抗の物語の中に織り込まれる。先づ Alex Morden の Bentick 大尉殺害事件が描かれる。Loft 大尉に仕事にもどるように命じられた Alex はつるはしを振り上げて躍りかかり, とめようとした Bentick 大尉を殺すが, 第四章の裁判の時に自由人に命令する権利はないと反抗する。

“I am not sorry. He told me to go to work—me, a free man!...”<sup>(6)</sup>

次の事件は Alex の銃殺の後, 何者かの銃弾で Prackle 中尉が肩をうたれたことである。しかし犯人はわからない。そして炭坑夫や鉄道員がサボタージュを始め, 侵略軍は無言の敵に囲まれテロに脅やかされる。Tonder 中尉が Molly Morden に殺されるのがその次の事件であるが, Will Anders と Tom Anders が England に行つて市長からの依頼を伝えた後では

爆撃機がやって来て、パラシュートにつけたダイナマイトを沢山落したため、それを用いた爆弾テロが頻発する。市長が抵抗運動をやめるようにという声明を出すことを拒否して処刑場にむかう時も近くで爆発が起る。事態は “The flies have conquered the fly paper.”<sup>(7)</sup> という状況になる。

### (3)

*The Moon Is Down* にはいま見て来た如く Orden 市長を中心とした市民の抵抗が描かれるが、同時に侵略軍の苦況も描かれる。Lanser 大佐は第一章に登場し、Orden 市長に協力を求めて断られるが、極めて紳士的な男である。彼は市長に言う。

“I hope we can get along together. It will be so much easier for everyone. I hope we can trust you....”<sup>(8)</sup>

第二章の卜書きのような説明によれば、Lanser 大佐は20年前に戦争に参加した経験があったが、戦争は全くつまらないものであることを知っている。そして市民を裏切って侵略軍の手引をした Corell を市長にするのを拒否する良識をもっている。彼は Alex Morden に死刑の宣告をするように市長に頼んで断られるが市長の言い分に辛抱強く耳を傾ける。彼は Prackle 中尉が何者かにうたれる状況になって遂に市長を保護監禁することにする。彼は司令部のやり方に批判的であるが、Corell に押し切られて市長の逮捕と処刑に動く。

Lanser 大佐の司令部にいる将校のうち軍人らしい厳格さを持っているのは Loft 大尉だけで、Hunter 少佐、Bentick 大尉、Prackle 中尉、Tonder 中尉は普通の人間に描かれる。Bentick 大尉は第二章の説明では家庭的な男で子供とクリスマスが大好きで、イギリスかぶれの野心のない男であるが、第二章の終わりでは Alex Morden に殺されてしまう。Prackle 中尉は大学の在學生で絵がうまく Tonder 中尉の妹に夢中な青年であるが第四章で肩をうたれ、第五章では故郷に帰りたくなっている Tonder 中尉の言葉を制しながら、第七章では自分自身ふさぎこむようになり Lanser 大佐に軍人の宿命を説教される。Tonder 中尉は詩人でロマンチストであったが、重苦しい雰囲気にならぬ第五章では故郷に帰りたいたいと言い、征服しているのに包囲されている自分たちの立場をヒステリックに笑う。そして第七章では Molly Morden に慰さめを求め愛をささやくが、彼女に殺されてしまう。

侵略軍の将校達が意外に紳士的で常識的な普通の人間として描かれているので、作品が出版された戦争中には激しい非難の対象となったが、Steinbeck は後にドイツ人も人間であると弁明している。

The War came on, and I wrote *The Moon Is Down* as a kind of celebration of the durability of democracy. I couldn't cenceive that the book would be denounced.

I had written of Germans as men, not supermen, and this was considered a very weak attitude to take. I couldn't make much sense out of this, and it seems absurd now that we know the Germans were men, and thus fallible, even defeatable...<sup>(9)</sup>

## (4)

この作品が侵略軍に占領された北欧の町での市民の抵抗運動を、市長の行動を軸として描いた作品であることは前に述べた。しかし問題はそれが文学として十分に描かれていないことである。その大きな理由は、多くの批評家が指摘するように、作品の主題が納得される story に支えられていないことである。French は “He failed to correlate his moral with his plot.”<sup>(10)</sup> と言い、Fontenrose は “But although we are told in the novel that freemen in a democracy have a strength that tyranny cannot break, the narrative does not support this thesis.”<sup>(11)</sup> と言い、Watt は “The danger is that these ideas divorced from or not deeply embodied in a fully felt reality, may be manipulated too easily, like pieces in a chess-game.”<sup>(12)</sup> と書き、Astro は “Its failure as art is traceable not to Steinbeck's refusal to polemicize the horrors of Nazism (actually, neither World War II nor the Nazi army is mentioned in *The Moon Is Down*), but rather to his inability to relate an abstract philosophical vision to concrete reality.”<sup>(13)</sup> と述べ、Levant は “What is missing is any great effort on Steinbeck's part, beyond asserting that free men will not be conquered, to put the violent actions in a context that rationalizes the process by which individuals become group-man or to explain how group-man resists conquest when the people are unarmed and starved.”<sup>(14)</sup> と言っている。

主題が story に支えられていないということは主題を表現する人物または人物群の行動描写が不十分だということである。Orden 市長の場合、第六章で Dr. Winter と Molly Morden の家へ行き、England へ行こうとしている Anders 兄弟へ軍事施設の爆撃やダイナマイトなどの投下を頼むのが唯一つの行動らしい行動で、あとは市長邸で Lanser 大佐の要求を拒否したり、Bentick 大尉を殺した Alex Morden を励ましたり、民主主義の自由人が終局的に勝つと言うだけである。Orden 市長の人物も経歴も説明されず、彼の思想の形成過程の説明もなく、ただ、いくつかの場面で立派な事を述べるだけであり、われわれはふと Steinbeck の意見を Orden 市長は代弁しているだけだと考えてしまう。Lanser 大佐の要求を拒否する行動は、市長の職や死を賭けるものである筈なのに、Orden 市長の心配や悩みや不安が全く描かれなため、読者は市長に共感することが出来ない。最終章になって市長は Dr. Winter に自分の死刑が避け

られないことを述べ、恐怖のために逃走や助命嘆願も考えたなどと人間らしいことを言ったりするが、市長に人間的共感のない読者の心は動かされることはなく、まして自分の死を Socrates の死と同様に考えて、Socrates の弁明の言葉を思い出そうとしている市長の姿は、そこに至るまでの苦悩の描写のないことから同情をひくことはなく、センチメンタルで独りよがりと思われるのである。抵抗運動を書いた作品の幕切れとしては、如何にも迫力がないのである。作品は次のように終る。

In the doorway he turned back to Dr Winter.

“Crite, I owe a cock to Aselepius,” he said tenderly. “Will you remember to pay the debt?”

Winter closed his eyes for a moment before he answered, “The debt shall be paid.”

Orden chuckled then. “I remembered that one. I didn’t forget that one.” He put his hand on Prackle’s arm and the lieutenant flinched away from him.

And Winter nodded slowly. “Yes, you remembered. The debt shall be paid.”<sup>(15)</sup>

*The Grapes of Wrath* の終りで Rosasharn が飢えた男に自分の乳を飲ませる場面以上のセンチメンタリズムが *The Moon Is Down* の最後にも漂っている。Orden 市長は描写不十分のため、生きた人間として描かれていないのである。Lisca の次の言葉は市長にもあてはまる。

The figures in *The Moon Is Down*, both invaded and invaders, are not real people who suggest certain qualities; they are qualities masquerading as human beings.<sup>(16)</sup>

その結果前述したように市長が述べるもっとも重要な言葉—“Free men cannot start a war, but once it is started, they can fight on in defeat. Herd men, followers of a leader cannot do that, and so it is always the herd men who win battles and the free men who win wars. You will find that is so, sir”<sup>(17)</sup>—すら宙に浮くのである。French は言う。

Surely no one on the Allied side could condemn this heartening oration. Unfortunately it remains oratory; the story does not illustrate its truth.<sup>(18)</sup>

## (5)

中心人物の Orden 市長の描写不十分の原因の一つは Steinbeck の気が散り過ぎて市長に集中していないことである。抵抗運動を市長を中心として書くだけで大変な仕事なのに、侵略軍の将校に不十分な描写を与えることに頁をさき、さらに本筋との関係が十分ではない他愛もない会

話にかなりの頁を与えている。第1章の召使い Joseph と Dr. Winter の会話はその典型である。

“Eleven o'clock?” Doctor Winter asked.

And Joseph answered abstractedly, “Yes, sir. The note said eleven.”

“You read the note?”

“No, sir. His Excellency read the note to me.”<sup>(19)</sup>

Doctor Winter repeated, “Eleven o'clock, and they'll be here then, too. A time-minded people, Joseph.”

And Joseph said, without listening, “Yes, sir.”

“A time-minded people,” the doctor repeated.

“Yes, sir,” said Joseph.

“Time and machines.”

“Yes, sir.”<sup>(20)</sup>

第8章で市長が Socrates の言葉を思い出そうとし、Dr. Winter が手助けをし、Lanser 大佐までがまきこまれている姿は、それが市長の描写に加えるものがほとんどない時、この作品の集中性の欠如と、そこから生れる緊張感の不在を象徴している。French は言う。

Even though written like *Of Mice and Men* for almost direct dramatization, *The Moon Is Down* lacks the sense of almost overpoweringly urgent movement towards an irresistible catastrophe that distinguished the earlier narrative. One is aware of one magnificent character, Mayor Orden, who grows in stature and moves splendidly towards an unworthy doom; but the author too rarely focuses upon the Mayor.<sup>(21)</sup>

出版直後この作品について賛否両方の批評が洪水のようにあり、その主な問題は世界危機に対する Steinbeck の自己満足的で平静な態度であったと言われるが、重要人物の描写に集中せず主題と関係の薄い場所にエネルギーを使っているテンポの遅さが、反対派の批評の根底にあったと思われる。

Steinbeck が Orden 市長に集中出来なかったのは Orden 市長に興味を持てなかったからであり、抵抗運動で積極的に活動しない市長を中心としたことがそもそもの誤りであったのである。*In Dubious Battle* (1936) におけるように、闘争の活動家を中心として抵抗運動を描くべきであったと思われる。

## (5)

侵略軍に対する市民の抵抗運動の状況は第5章の初めにト書きのように説明されるが、作品の中の事件としては Alex Morden による Bentick 大尉殺害がある。Loft 大尉に仕事にもどるように命じられた Alex は pick を振りあげて襲いかかり、止めに入った Bentick 大尉を誤って打ち殺してしまう。Alex は裁判で、前に引用したように、自由人の自分に働くように命令したからやったのであって、謝まることはないと言い放つ。そして市長はその行為を賞賛するのである。

しかし、Alex が仕事をするように命じられたくらいのもので Loft 大尉にむかって行き、止めに入った Bentick 大尉を殺してしまう行為が市民の抵抗運動の象徴なのだろうか。家庭的で犬とピンク色の幼児とクリスマスが好きで、イギリスかぶれをしていると描かれる Bentick 大尉が Loft 大尉の代りに殺され、殺した人間は謝まらず、市長がそれを立派な行為であるとして読者の共感が得られるであろうか。

Tonder 中尉の場合も同様である。ロマンチックな詩人の彼は重苦しい日々には耐えられなくなり、故郷に帰りたい、女の子が欲しいと口走るが、さらに戦争の無意味なことをわめいて Loft 大尉になぐられる。その Tonder 中尉は町で見かけた Molly Morden に魅せられ、冬の夜に Molly の家を訪ね、自分のさびしさを訴え、愛を求める。しかし次にもどって来た時 Molly に殺されてしまう。

夫の Alex を銃殺刑で失った Molly が復讐心を抱いていることは理解出来るが、ロマンチックなやさしい青年に描かれる Tonder 中尉が愛を嘆願した後で殺されるという状況には、抵抗運動というより残酷物語が存在するのであって、抵抗運動が持たねばならぬ倫理性を欠いている。市民が空輸によりダイナマイトを手に入れた後で、爆弾テロが頻発する様子が描かれるが、侵略軍の横暴さの描写が欠けているために、テロは無差別テロの感じを与え、読者は市民の抵抗運動に心から共感することはない。Levant はそれを指摘する。

A recollection of freedom is their moral justification for the creation of terror, but the recollection has no organic connection with the terror or the mechanics of group-man. Another way of putting this is that the natives kill the invaders because they are there, not because they restrict freedom.<sup>(22)</sup>

Orden 市長の描写が不十分で説得性がないばかりか、市民の抵抗運動も描写不十分のために正義や人道の裏付けを欠いているのであり、読者の同情を得ることはないのである。

## (6)

市長や市民の抵抗運動の描写不足は、作者が story との関係の稀薄な召使 Joseph や cook の Annie の他愛のない会話や Socrates の言葉を思い出す場面などを導入したために起ると前述したが、同時に、侵略軍将校達の不十分な人間描写の導入も原因となっている。侵略軍の Lanser 大佐, Hunter 少佐, Bentick 大尉, Loft 大尉, Prackle 中尉, Tonder 中尉は Steinbeck によれば superman としてではなく、人間として描いたと言うが、彼等の描写も表面的で不十分なのである。Lanser 大佐は戦争の愚劣さを知っているが命令をそのまま実行するしかないと悟っており、紳士的に Orden 市長に協力を要請して断られ、遂に Corell に迫られて市長を保護監禁し、最後には処刑命令を出すことに追い込まれる。市民の抵抗運動が Orden 市長を中心として描かれたように、侵略軍の苦況は Lanser 大佐を中心として描かれるが、Lanser 大佐の苦しみはほとんど描かれない。一ヶ所だけ司令部の命令を批判する場所があり、彼の人間らしさが明示される。

Hunter, I'm a good, loyal man, but sometimes when I hear the brilliant ideas of headquarters, I wish I were a civilian, an old, crippled civilian. They always think they are dealing with stupid people. I don't say that this is a measure of their intelligence, do I?"<sup>(23)</sup>

しかし彼は司令部の命令には従う人間であり、Orden 市長の処刑についても次のように言う。

"I will carry out my orders no matter what they are, but I do think, sir, a proclamation from you might save many lives."<sup>(24)</sup>

Lanser 大佐はもし掘り下げて描写をすれば反戦小説の主人公となる人物であるが、Steinbeck は Lanser 大佐に人間的、紳士的な姿を少し与えているだけで、結局影の薄い人物としてしまっている。

侵略軍の苦況を表わすと考えられる人物に Tonder 中尉と Prackle 中尉があるが、ロマンチックな詩人である Tonder 中尉は第5章で、「故郷に帰りたい。女の子がほしい。総統は気が狂っている」とわめいて Loft 大尉に顔を叩かれ、第六章では Molly Morden の愛を求めて殺されてしまうのであり、Prackle 中尉は何者かに肩を撃たれるが、第5章では Tonder 中尉に泣き事は云うなど言いながら、第7章では神経過敏で陰気になっていて、Lanser 大佐から説教される。彼等は中心人物としての描写が与えられていないので止む得ないが、侵略軍の苦況を瞥見させるだけである。

Lanser 大佐を始めとする侵略軍将校の描写は、Orden 市長の描写と同様に不十分であって、出版当時ドイツ軍と思われる侵略軍の書き方が甘いと非難されたが、その甘い侵略軍さえ十分に



描かれていないと Fontenrose は言のである。

The fault, however, does not lie in his attempt to reveal the humanity of German officers, but in the false humanity that he gave them. These men do not ring true; they are like sentimental Americans.<sup>(25)</sup>

文学作品は一つの統合された感動を与えるのがその目的の一つであるが、市民の抵抗運動を抵抗者の側と侵略者の側の双方から書いて統一をとることは至難の技であって、Steinbeck はそれを試みて失敗したのである。侵略者の苦況は、もしそれがドラマとしての説得性をもって描かれるとすれば、市民の抵抗運動の力強さをその背後に浮立たせる筈であり、それだけで立派な作品になるのである。Steinbeck は抵抗運動の側にも侵略者の側にも同情して両方を書こうとし、両方とも十分に描き切れず、両方を統合することも出来ず自らの混乱の姿を見せてしまうのである。Steinbeck はどちらかの側の描写に集中すべきだったのである。

(7)

*The Moon Is Down* は人物描写の不足と題材の融合の失敗のため多くの批評家に非難される作品となってしまったが、その根底に Steinbeck 自身の混乱が潜んでいる。Marks はこの作品に Steinbeck の新しい個人尊重の初まりを見て評価しているが、<sup>(26)</sup> その建設的人生観こそ *In Dubious Battle* (1936), *Of Mice and Men* (1937), *The Grapes of Wrath* (1939) の根底を作った “non-teleological thinking” を破壊し Steinbeck の混乱を招いたのである。

“non-teleological thinking” は Steinbeck が年来の思想を表現したといわれる *Sea of Cortez* (1941) —後に *The Log from the Sea of Cortez* (1953) として Steinbeck の書いた部分が発表される—に定義されているが、出来事を結果としてよりは成長や表現と考えて意識的に受け入れる考え方であり、Darwin が理解した自然淘汰と関連した考え方に由来するという。つまり出来事を冷静に見て受け入れようという考え方でその客観的な観察は残酷に見えるかも知れないが大きな愛情を秘めていると言うのである。

これがもっともよく表れたのは *In Dubious Battle* で、ここでは共産黨員も農場労働者も農場主も理想化されることなく冷たく描写され、人生の実相は盲目的な戦いであることを示している。*Of Mice and Men* においても Steinbeck は George と Lennie いう二人の移住労働者の運命を見据えており、*The Grapes of Wrath* でも Oklahoma から California へ続々と移住する農民達の苦難の生活を Steinbeck は彼等と生活を共にしながら観察したのである。これ等の作品の根底には事態を冷静に観察する態度と、対象に対する大きな愛情が存在している。資本家が悪く労働者が正しいというような皮相な先入観は全く入っていないのである。

しかし、*The Moon Is Down* では Steinbeck は自分の目で事態を見ることはなく、Dono-

van 大佐の話を聞いて短い期間の間に民主主義讃歌を書き上げたのである。つまり、“non-teleological thinking”の観察をすてて、「人間の意志は挫かれない」とか「自由人は最後には勝つ」という口当りのよい言葉を裏付けもなく書き始めたのである。*In Dubious Battle*のDoc Burtonが善悪の判断に曇らされることなく事態を見たいと言った言葉<sup>(27)</sup>にそむいて、全体主義は悪い、民主主義はよいという前提のもとに作品を書いたのである。そしてその結果、描写が不十分で文学的感動を欠いた観念だけが独り歩きをする作品を書くのである。Artroは言う。

In short, despite Steinbeck's efforts to control his pattern of fictional reality, *The Moon Is Down* is little more than a somewhat altered version of Steinbeck (still immersed in the Ricketts materials he used in shaping the narrative portion of *Sea of Cortez*) playing “speculative metaphysics” with his own and Ricketts' ideas.<sup>(28)</sup>

Steinbeckの後の作品が地道な観察をはなれて観念的な傾向を持ち、文学作品として低下して行く姿を見る時、戦争に協力して *The Moon Is Down* を書き、年来の創作態度を棄てて混乱の姿を見せる Steinbeck は第二次大戦の被害者の一人だったと思われるのである。

## 注

- (1) 伝記的事柄については主として Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck* を参照した。
- (2) *The Short Novels of John Steinbeck* (The Viking Press), p. 239.
- (3) *Ibid.*
- (4) *Ibid.*
- (5) *Ibid.*, p. 268.
- (6) *Ibid.*, p. 238.
- (7) *Ibid.*, p. 246, 268.
- (8) *Ibid.*, p. 221.
- (9) *Steinbeck and His Critics*, p. 39.
- (10) Warren French, *John Steinbeck*, p. 115.
- (11) Joseph Fontenrose, *John Steinbeck*, p. 98.
- (12) F. W. Watt, *Steinbeck*, p. 78.
- (13) Richard Astro, *John Steinbeck and Edward F. Ricketts*, p. 150.
- (14) Howard Levant, *The Novels of John Steinbeck*, p. 155.
- (15) *The Short Novels of John Steinbeck*, p. 269.
- (16) Lisca, *Wide World*, p. 191.
- (17) *The Short Novels of John Steinbeck*, p. 268.
- (18) French, *John Steinbeck*, p. 115.
- (19) *The Short Novels of John Steinbeck*, p. 212.
- (20) *Ibid.*
- (21) French, *John Steinbeck*, p. 114.

- (22) Levant, *The Novels of John Steinbeck*, p. 156.
- (23) *The Short Novels of John Steinbeck*, p. 260.
- (24) *Ibid.*, p. 269.
- (25) Fontenrose, *John Steinbeck*, p. 99.
- (26) Lester Jay Marks, *Thematic Design in the Novels of John Steinbeck*, p. 105.
- (27) *In Dubious Battle* (The Modern Library), p. 143.
- (28) Astro, *John Steinbeck and Edward F. Ricketts*, p. 157.